

## 歴史叙述の現在—共感への可能性—

### 0. はじめに

四つの歴史認識を巡るスタンス

a マルクス主義的

「世界史へと連なる歴史」ヘーゲルの歴史哲学

b 科学技術史としてとらえる

a の「世界史へと連なる歴史」の延長上で科学技術の発展が人種や民族の垣根を越えて世界史を形作るというもの

c 歴史修正主義

歴史相対主義の極端な表れ

d 国民国家批判論

ナショナルアイデンティティや国民国家の虚構性を理論的に批判し  
歴史認識の新たな展開の可能性を探る

☆「実証主義」という方法論的前提を共有している。

☆最近では、c と d が組み合わさった認識が生まれつつある。

☆「慰安婦」を通じて、浮き上がる現代の歴史叙述の問題点を考えたい。

### 1. 歴史修正主義

歴史修正主義とは本来ポジティブなものだったが、近年ネガティブに使われている。  
戦争責任を否認する論者がこれを名乗って活動していることが大きく影響している。

「戦後の歴史教育は、日本人が受け継ぐべき文化と伝統を忘れ、日本人の誇りを失わせるものでした。特に近現代史において、日本人は子々孫々まで謝罪し続けることを運命づけられた罪人のごとくにあつかわれています。冷戦終結後は、この自虐的傾向がさらに強まり、現行の歴史教科書は旧敵国のプロパガンダをそのまま事実として記述するまでになっています。世界にこのような歴史教育を行っている国はありません。」

(「新しい歴史教科書をつくる会」趣意書、1997 年 1 月 30 日)

「われわれはここに戦後 40 年の発想を改め「歴史とは何か？」の本線に絶ち帰り、どの民族もが例外なく持っている自国の正史を回復すべく努力をする必要を各界に強く訴えたい。われわれは日本の次世代に自信を持って伝えることのできる良識ある歴史教科書を作成し、樵供することを目指すものである。」

(「新しい歴史教科書をつくる会」趣意書、1997 年 1 月 30 日)

これらの考えの根底にある一国民、民族の同一性、本質主義実体論的な国民観

☆多くの現代人にとって、日本人としての連続性は

あくまで法的政治的な「連続性」である。

☆歴史修正主義にとって戦争責任を果たす事は本来ポジティブな行為である。

## 2. 「構成主義的国民観」と「歴史の物語論」

歴史修正主義者の「本質主義的」国民観にかわってむしろ「構成主義的」国民観に立ち、なおかつ「歴史の物語論」を組み合わせたものが90年代後半から登場する。かれらによれば、国民にアイデンティティを与えるのは「国民形成の物語」である。国民の正史とは「国民の物語」である。

### 「構成主義的国民観」

国民というのは、実態的な存在であるなしを考えるのではなく

例えば宗教が存在するように構成主義的にあるものだ。「想像の共同体」

### 「歴史の物語論」

「歴史叙述は記憶の（共同化）と（構造化）を実現する言語的製作にほかならない」

「物語りえぬことについては沈黙せねばならない」

（野家啓一『物語の哲学』1996、岩波現代文庫）

歴史と言うものは、過去の出来事や事実は客観的に実在するものではなく、「想起」を通じて解釈学的に再構成（＝物語る）されたものである。個人の経験は「物語る」ということによって「普遍性」と「抽象性」を獲得し、「記憶の共同体」としての歴史に登録される。歴史を語るということはいやおう無く「誰が誰に向かって語るのか」という民族、人種、階級、性別、世代などの差異（偏頗心）を含みこんだ政治性をもつ。また、「物語り」が記憶の共同化と言う、人と人の間に成立する出来事であるので、好むと好まざるとに拘らず倫理性を持つ。積み重なる人間的時間を軸として張り巡らされた無数の物語ネットワークにのみ歴史はその存在根拠を持つ。

よって「物語りえないことについては沈黙せねばならない」

### 3. 語りえないものと「実証主義」という方法的前提

☆語り得ないものとは何か…

「思い出」と「物語行為」の差異

つまり、「語りえぬ」記憶と言うのは、一定の脈略によって結び付けない記憶の群れということになる。「ストーリー」をもたず「コンテクスト」を持たず「時間系列」を持たず切れ切れしていて「物語」にならない記憶…弱者の記憶は、『共同体の記憶』として、昇華しにくい現状があるのではないだろうか。

また、記述に作用している修辞や比喩の問題化、さらに証拠と記憶が内在させている主観性、客観性の問題が存在する。

### 4. 「証言」と「実証」のあいだ—慰安婦問題—

実証史学の方法論は歴史的事実をモノのように実在するものとみなすから、従軍慰安婦の「証言」を受け入れることが出来ない。

(言語論的展開)

言語こそ人間の意識を構成する主体である。社会的な意味を作り出すものだ。言説や文化を共有しているということは、実在についての我々の認識にあまりに深く浸透しているから社会生活の科学的な説明と言うことがそもそも不可能になってしまう。どんな立場からも共通して承認されるような「客観的事実」なるものは存在しないと認める認識的な立場

☆上野千鶴子は…

全体像を特定の実証的事実にすり替え、それによって全体像を抑圧している

☆「証言」がある限り強制連行は存在したとするもののような見解はいきすぎではないか。

むしろ従来の実証的な研究が明らかにした事実の上に、「証言」の中にある誇張や不安定さや物語性からそこに働くさまざまな権力を統み取ろうとする作業をとおして全体像を構成する事によって、複雑な論理で捕らえるべき重要な問題が見えてくるのではないか。

## 5. おわりに

- ☆生産的な対話は自己の立場を率直に提示する事によってしかありえない
- ☆経験されているかたの「リアリティ、説得力」と歴史記述のあいだ
- ☆日本人でもある「私」としてさまざまな歴史叙述をどうよみとるか
- ☆私の戦争責任に対する考え

### 【参考文献】

- 『物語の哲学』野家啓一、岩波現代文庫、2005/02
- 『姜尚中の政治学入門』姜尚中、集英社新書、2006/02
- 『〈歴史〉はいかにして語られるか』成田隆一、NHK ブックス、2001/04
- 『歴史/修正主義』高橋哲哉、岩波書店、2001/01
- 『歴史叙述の現在』森明子編、人文書院、2002/12
- 『差異の政治学』上野千鶴子、岩波書店、2002/02
- 『ナショナリズムと「慰安婦」問題』日本の戦争責任資料センター編、青木書店、1998/09
- 『世界』「「従軍慰安痛」問題と歴史家の仕事」安丸良夫、1998/05
- 『思想』「歴史思想・歴史叙述における言語論的展開」ゲオルク・G・イッガース、1994/04
- 『思想』「歴史・歴史主義・中世テクストの社会倫理」ゲイプリエル・M・スピーゲル、1994/04